

廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論 (三)

—— 研究史後篇 ——

橋本 富太郎

目次

はじめに

一、各分野の研究成果

(一) 廣池の事跡に関する研究

(二) 廣池提唱の諸概念の研究

(三) モラロジ―研究の一環で

(四) 諸専門領域への位置づけ

(五) 神道

二、時代区分について
おわりに

はじめに

拙稿「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論 (二) —— 研究史
前篇」¹⁾ (以下「前篇」と略す) では、廣池千九郎に関する研

究史を、神道の分野に限らず、研究の発生から現代に至るまで時代順に概観してその蓄積と展開を跡づけた。続いて本稿「研究史後篇」では、「前篇」で取り上げた諸文献に雑誌論文等を加えて研究の分類を試み、「神道」における廣池千九郎研究の現況を把握する。

研究領域を鑑みて分類は四種類とし、必要に応じて細目を設け、若干の考察を試みる。そうすることによって自ずから課題が浮上するであろう。分類は次のとおり、

- ① 廣池の事跡に関する研究
 - ② 廣池提唱の諸概念の研究
 - ③ モラロジ―研究の一環で
 - ④ 諸専門領域への位置づけ
- 以上の四種類とする。

第一章では、この分類に従い研究史を整理し、最後に「神道」に関連する研究を検討する。第二章では、廣池千九郎研究において不可欠な「時代区分」を振り返り、その長所・短所を考察する。そして、おわりに、課題を指摘するという構成である。

なお、前稿同様、「廣池」と「広池」の書体の相違は原文の表記による。敬称および敬語は省略させていただいた。

一、各分野の研究成果

(一) 廣池の事跡に関する研究

道徳科学の学習においては、「廣池の事跡」は道徳実行上の指標に位置づけられる。廣池は晩年次のように述べていた。

私の最高道徳の実行の事蹟と云ふものを知らねば真の最高道徳とか、或は真の道徳科学と云ふものは解らぬのであります。即ち此道徳科学の教は言論の教へでなく実行の教へでありますから、矢張り之を実行した私の精神と行為即ち私の道徳的事蹟そのものが道徳科学の生命であるのです。

(『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』昭和十六年、四頁)
また、「モラロジーと最高道徳とは余の実行せる生命ある科学と道徳と也」(『モラロジーの重要原理より勞使兩階級の自覚と心得を説明す』昭和十一年二月二十一日)という記述もあり、『道徳科

学の論文』にも「本書に述ぶる所の最高道徳は、悉く私の過去に於て実行させていただいた所の事」(第一緒言第五条)ともい^②い、廣池の事跡を知ることが道徳科学を理解する上で重要な意味があった。したがって、廣池千九郎研究の草創期はこの事蹟研究が中心であり、質・量ともに充実している。学術書ではないが、中田中や香川景三郎、松浦香ら廣池の高弟たち、および廣池千英や廣池富ら親族らによる著述の多くは、早くから長年にわたり廣池の事跡を記録し、そこから道徳的要素を学ぶものであ^③った。

昭和六十年からの『廣池千九郎日記』全六冊(広池学園出版部)の刊行もこのような事蹟研究の線上にある。刊行の経緯や意味などについては、大澤俊夫の「『廣池千九郎日記』刊行の意義」(『モラロジー研究所報』昭和六十年十月号)^④に詳しいが、そこにも引用する廣池の教訓は次のようにいう。

モラロジーの実質たる伝統の原理なるものは、第一はモラロジーの創立者たる予の積年の実行そのものである。第二は予の実行を述べてあるところのモラロジーの原典である。第三はモラロジーを世界の人々に誤りなく実行させようとして発せしところの教訓、訓示、達示、教育集である。今後モラロジーを実行せんとするものは、この三つの標準を標準として進んで行かねばなりません。(廣池千英『モラロジー重要教訓集』第一輯、道徳科学研究所、一四頁。モラ

ロジ研究所編刊『教訓抄』平成八年、七五・七六頁収録）モラロジの説く最高道徳を実行しようとする者の「標準」のうち、「原典」や「教訓」よりも重視すべき第一の標準が、廣池の実行そのものとされたのだった。同『日記』は、廣池の日々の行動に加え、魂の省察というべき精神の自画像が描き出されており、廣池研究の基本文献となっている。また、年表を兼ねた詳細な索引を備えており、廣池により案出された概念と事跡との結びつきを読み取ることができる。別冊のモラロジ研究所編『廣池千九郎日記用語解説』（広池学園出版部、平成六年）は、多くの関係者の略歴や難解な用語の解説が豊富に収められており、現時点におけるもつとも詳細な「廣池千九郎辞典」ともいえるだろう。

ではこれより事跡研究のあらましを見ていく。

① 事跡の通史のおよび時代別研究

浅野栄一郎の一連の研究は、廣池の人生全般にわたり、他に先駆けて廣池の著述や文書を多用する書誌学的研究に特色があった。『廣池博士の資料研究―主として京都時代―』（広池学園事業部、昭和四十六年）、『廣池博士の資料研究―中津時代―』（同、昭和五十四年）のほかいくつか稿本もある。

廣池の事跡における新資料の発掘と意味づけにおいても、やはり井出元が研究を牽引してきた。廣池の人生全般を扱うもの

では「廣池千九郎とモラロジ―学究と求道―」⁶⁾（『モラロジ研究』二十五号、昭和六十三年）、「祖述と更生」⁷⁾（同、六十一号、平成二十年）がある。

明治から大正にかけての事跡研究では、近代史家の櫻井良樹による歴史学的専門性の高い研究が、周辺事情の把握や時代における位置づけにおいて優れた業績といえる。櫻井の論考は、「自由民権運動期の廣池千九郎―義挙・挫折・展開・麗澤館退塾をめぐって―」（同、二十号、昭和六十一年）にはじまり、「明治末期の社会・天理教・廣池千九郎―天理教入信の社会的背景―」（同、二十五号、昭和六十三年）、「国民道徳運動推進者としての廣池千九郎―斯道会における活動―」（同、二十八号、平成元年）、「第一次世界大戦期における天理教団と廣池千九郎」（同、三十五号、平成四年）、「大正時代中期の天理教と廣池千九郎―天理教の教勢発展と関連して―」（同、四十号、平成六年）、「大正時代末期の天理教団と廣池千九郎―天理教団からの離脱―」（同、四十一号、平成七年）と続いた。

土屋武夫の「廣池千九郎と明治大正期の労働問題」（同、五十八号、平成十八年）は労働問題を中心にその時代における廣池の存在をとらえており、少し時代が下ると、山田順「大正後期・昭和初期における廣池千九郎のモラロジ普及活動」（同、二十五号、昭和六十三年）のように焦点がモラロジを中心とする事跡研究となる。

明治末から大正初期の廣池の精神の動きや修養に関する研究は、立木教夫が長年取り組んでいる。「廣池千九郎博士と矢納幸吉会長―出会いの前後の事蹟とその意義について―」（同、四十号、平成六年）、『「知識」と「信仰」をいかに調和させるか―明治十四年における天理教教理研究に基づく実地教育の事蹟―』（同、四十七号、平成十二年）、「廣池千九郎と天理教本島支教会」（一）（五）（同、五十六号、平成十七年／五十八号、平成十八年／五十九号、平成十九年／六十七号、平成二十三年／六十八号、平成二十三年）等。

立木のもととの専門は自然科学だが、その一方で下程勇吉の人間学に学び⁸⁾、廣池の人物研究にも継続的に業績を上げている。大正期の廣池の精神史を扱うものはさらに、ピーター・ラフの「I had promised God...: Chikuro Hiroike and the Practice of Vows」（同、六十五号、平成二十二年）や諏訪内敬司「廣池千九郎がソクラテスに学んだもの」（同、二十五号、昭和六十三年）などがあり、少し時代の範囲を広げると、徳田佐太郎「廣池千九郎の安心立命（法学博士、1909-1938年を中心として）」（同、四十七号、平成十二年）や、栗原英二「予ノ心動カヌヤウニ」（同、二十五号、昭和六十三年⁹⁾）等の論考がある。

② 他者との交流をとおして

廣池における師弟関係や交友関係から廣池の事跡を探り、思想を分析する研究にも顕著な業績がある。「前篇」で触れた

『日本の近代化と精神的伝統』（モラロジー研究所編、広池学園出版部、昭和六十年）の「廣池千九郎の最高道德圏」で挙がる人物の大半にはこの視点が入っている。そこにおいて新渡戸稲造を書き、後年さらに新渡戸研究を進める諏訪内敬司は、「研究ノート」廣池千九郎と新渡戸稲造の交流関係」（モラロジー研究）十九号、昭和六十年）でも新渡戸と廣池との交流と比較によって廣池の事跡を捉えていた。中野千秋の「廣池千九郎と中野金次郎」（同、二十五号、昭和六十三年）は、廣池による経営指導と中野の事業展開から廣池の道経一体思想を分析している。白石（山崎）成子の「（研究ノート）白鳥庫吉と廣池千九郎―信仰と歴史研究における共通点―」（同、五十九号、平成十九年）は、廣池の学友で専門・年齢も近く、学問的交友が深かったにもかかわらず、これまで手が付けられていなかった白鳥庫吉との関係史を開拓したものだ。水野治太郎「穂積陳重『法律進化論』と廣池千九郎『道德進化論』―モラル・サイエンスノート（その2）―」（麗沢大学紀要）八十二号、平成十八年）は、「前篇」で述べた『経国済民』の学（麗澤大学出版会、平成二十年）の内容と重なるところがあるが、穂積から廣池への研究の立場・方法の継受を明らかにするばかりでなく、その前史までも視野に入れた力作であった。

欠端實には、廣池と国学者たちとの交流に関する顕著な研究成果があるが、それらについてはのちに「神道」のところで触

れる。

③ 研究活動に関する研究

次に、廣池自身による研究活動にそれぞれの観点からスポットをあてた研究を見てみよう。井出元による最初期における廣池研究は、「廣池千九郎における東洋思想史研究」(『モラロジー研究』十号、昭和五十六年)であった。水野治太郎には昭和四十一年、「前篇」既出の『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』(昭和四十一年)に早くも「廣池千九郎博士の科学思想―学問観と方法の特色―」があり、「廣池千九郎の法、言語、道徳の世界―比較方法論をめぐる―」(『モラロジー研究』十五号、昭和五十八年)などへ展開している。所功も「(覚書)『歴代御傳』の構想と稿本」(『国書逸文研究』十号、昭和五十八年)において廣池の研究方法・観点に注目していた。

廣池の自然科学に関する研究活動をとらえた研究も充実している。廣池は福澤諭吉の創設による洋学校・中津市学校に学んだ時期があることから科学技術には少年時代から親しみがあつた。後年、穂積陳重より「法律学を科学的に造り上げるには、自然科学の力に待たねば為らぬ事が多い」(前掲『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』一七頁)との指導を受けて、いよいよ本格的に自然科学の研究成果を取り入れている。

立木教夫には「廣池千九郎の『精神作用論』に関する一考察

―現代の『心―身―心―脳理論』との関係において―」(『モラロジー研究』二十七号、昭和六十三年)をはじめ、「廣池千九郎の遺伝学受容に関する一考察―なぜ廣池は遺伝学に注目したのか―」(同、三十八号、平成五年)や、自然科学への接近に注目した「(研究ノート)廣池千九郎、実験心理学を学ぶ―元良勇次郎、松本亦太郎に連なる心理学者たちとの交流―」(同、七十二号、平成二十六年)もある。

ほかにも、ウォルター・タップズ(竹内啓二訳)「科学者としての廣池千九郎の貢献―過去と現代におけるモラロジーの心理学的基盤―」(同、二十七号、昭和六十三年)や川上晃弘「(研究ノート)廣池千九郎の進化論解釈に関する一考察」(同、四十九号、平成十三年)等が見出される。

『道徳科学の論文』を軸とした、大塚真三「廣池千九郎博士におけるモラロジーの発想と展開―道徳科学の論文を中心として―」(同、二十六号、昭和六十三年)と、同書の一節に着目した、松田和夫「『陰陽併感氣不定』考―廣池千九郎博士と藤惟寅の解釈をめぐる―」(『麗澤大学紀要』二十三号、昭和五十二年)も廣池自身の研究活動に注目した研究といえる。

廣池は、言語に関する研究においても時代を画する業績を上げており、とりわけ漢文法においては、その著『支那文典』が漢文の文法をはじめて体系化した書として歴史に位置づけられたのは、「前篇」で詳述した『生誕百年 廣池博士記念論集』(昭

和四十二年・以下『記念論集』と略す)における、牛島徳治「増訂支那文典」の意義について」に説かれたとおりである。その後、廣池における言語をめぐる研究は下火になっていったが、近年、梅田博之「廣池千九郎博士の『吏道』研究」(『言語と文明』十一号、平成二十五年三月)によってその朝鮮語研究が新たに注目されている。

法制史については、「前篇」に整理したのでそちらを参照されたいが、そのほかでは利光三津夫「廣池博士と日本法の研究」(『モラロジー研究』二号、昭和四十九年)や、廣池の研究方法や研究歴の中に『東洋法制史序論』を改めて位置づけた松村健一の『東洋法制史』の位置づけとその『道德科学の論文』に与えた影響について(同、四十四号、平成九年)があり、廣池の主張点にはあまり詳しく触れていないが、大石義雄「廣池博士の『日本憲法淵源論』について」(『社会教育資料』五十号、昭和四十二年)も廣池の法制史の中に挙げておくべきであろう。

(二) 廣池提唱の諸概念の研究

廣池は道德科学の体系化の過程で、最高道德の内容を五つの原理と百数十箇条におよぶ格言^⑩によって表した。こうした一つ一つの概念の形成過程を跡づけることは廣池千九郎研究の重要な地位を占め、井出元の研究の多くもこの観点によるものだった。井出の論考は「廣池千九郎の義務先行説の形成」(『モラロ

ジー研究』十二号、昭和五十七年)、「『伝統の原理』の形成―廣池千九郎の生涯と伝統尊重の精神の深化―」(同、二十号、昭和六十一年)、「『神の原理』の形成―廣池千九郎における信仰と道德―」(同、二十二号、昭和六十二年)、「廣池千九郎研究―『最高道德の格言』研究序説―」(同、三十号、平成二年)、「廣池千九郎研究―最高道德の格言の研究(2) 慈悲寛大自己反省―」(同、三十四号、平成三年)、「最高道德の格言の研究(3) 道德実行の原動力―篤く大恩を念いて大孝を申ぶ―」(同、三十六号、平成四年)、「『伝統の原理』の展開―廣池千九郎晩年の思想―」(同、四十号、平成六年)と続く。

水野治太郎にも『義務先行の原理』の社会思想的意義」(同、十二号、昭和五十七年)があり、美和信夫「廣池千九郎の格言『慈悲寛大自己反省』の形成過程に関する考察」(同、二十五号、昭和六十三年)や永安幸正「廣池千九郎と最高道德の構造―人心開発救済論の視座から―」(同、二十六号、昭和六十三年)なども格言を軸にした研究といえる。

「神の原理」は、上記の井出の研究のほかに、「前篇」に挙げた下程勇吉の「神の原理」(『廣池千九郎とモラロジー』平成元年)もあるが、玉井哲「廣池千九郎と神―廣池における実存と超越―」(同、四十五号、平成十一年)は廣池の存在根拠を明らかにしようという観点から「神の原理」を捉える試みであった。望月幸義の「モラロジーの神について」(同、三十四号、平成三年)も、「モラロジーの」と題されているが、実際には廣池による

「神の原理」の考察である。

五大原理や格言以外にも、廣池を特徴づける概念がいくつもある。その主たるものの「誠」¹²⁾については、欠端實「誠」の最高道徳的展開としての代受苦的礼拝―広池千九郎の最高道徳的救済の研究(一)―(同、三十号、平成二年)があり、「因果律」¹³⁾については、中野千秋「広池千九郎の企業因果律思想―企業因果律の社会科学の実証研究の可能性を探る―」(同、四十一号、平成七年)および、ピーター・ラフ「Chikuro Hiroike and the Nature of Moral Causality」(同、五十九号、平成十九年)がある。

もう一つ、「前篇」の『道徳・教育・経済』(昭和五十八年)における目黒章布「広池博士の自然観」のところで触れたが、廣池の道徳思想を表す重要な概念に、「自然の法則」¹⁴⁾がある。立木は、廣池の人生を貫くものは『自然の法則』の探求であったと設定し、その観点から人生を俯瞰した、「廣池千九郎博士がとらえた『自然の法則』―『自然』と道徳はいかにかわっているか―」(『比較文明研究』一号、平成八年)を著わし、この研究をさらに進めて「廣池千九郎博士の道徳思想の形―『自然の法則』という言葉の比較構造分析を通して―」(『モラロジー研究』四十六号、平成十一年)では、廣池の人生に通ずる同類性を確定し、「自然の法則」の内容をより明らかにするとともにこの語の構造比較によって、「自然の法則」は遅くとも『東洋法制史序論』執筆の頃には使用されていたことを実証した。岩佐信道の

「J. Lauwerys の cosmic modesty の考え方と廣池千九郎の宇宙自然の法則」(『言語と文明』十号、平成二十四年)も、「廣池は、宇宙自然の法則とは何かを生涯をかけて明らかにしようとしたということができよう」といい、「自然の法則」研究に加えるべきものである。岩佐は「相互依存」をテーマに長年「自然の法則」研究に取り組んできた。

(三) モラロジー研究の一環で

「モラロジー」という学問体系を対象とする研究において、廣池に言及するケースは提唱者であるのだから当然多く、その中の個々の論点に至ってはとてもしきり切れない量になる。「前篇」に掲げた『モラロジー創建五十年記念学術論文集』(昭和五十一年)や『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』(平成元年)収録の論文の多くもここに含まれよう。そこでこの場では、モラロジー全般に関係するものを中心に列挙するにとどめたい。

水野治太郎は、『モラロジー研究』の創刊とともに「(研究ノート)モラロジー研究の現状と課題」(同、一号、昭和四十八年)を著わし、廣池の道徳思想そのものともいえるモラロジーの研究状況を分析していた¹⁵⁾。さらに研究の可能性にまで論を進め「新科学モラロジーの使命―近代文明の克服―」(同、四号、昭和五十一年)を著わし、『道徳・教育・経済』(昭和五十八年)所収の

「道徳哲学とモラロジー」ではアメリカのカレッジ教育における道徳哲学との比較にまで展開していた。

ジョセフ・A・ラワリーズ・谷口茂(訳)「科学・道徳・モラロジー」(『モラロジー研究』四号、昭和五十一年)は廣池千九郎の道徳論における科学的研究方法に注目した論考ともいえる。ラワリーズによる研究については、川窪啓資の「モラロジーの国際化のためにーラワリーズ博士の国家伝統に関する御提案に対する管見ー」(同、八号、昭和五十四年)によってより深められた。川窪には、従来のモラルサイエンスとモラロジーとの相違点を検討し、モラロジーの特質を明示した「西欧のモラル・サイエンスの系譜から見たモラロジーの破天荒性」(『比較文明研究』第十六号、平成二十三年)もある。下程勇吉には「モラロジーの現代的意義」(『モラロジー研究』五号、昭和五十二年)があり、細川幹夫も教育学の観点から「『生涯教育論』とモラロジー」(同、昭和五十二年)において、廣池の学説の現代における教育的有用性を説いている。

望月幸義は「モラロジーとは何か」(同、二十二号、昭和六十二年)という論題でモラロジー研究の現状と課題を真正面から論じている。阿南成一の「モラロジーと現代自然法論」(同、六号、昭和五十二年)も、法と哲学、宗教の観点を加味しながらモラロジーに包括的な検討を加えた。

モラロジーの中心的テーマである「最高道徳」について、宗

武志は「聖人の伝統」(同、四号、昭和五十一年)という観点から掘り下げており、北川治男「最高道徳的主体性の特質ーモラロジーの現代的意義に関する一考察ー」(同、四号、昭和五十一年)や永安幸正「モラル・サイエンスと道徳および信仰ー広池千九郎の『最高道徳論』と大塚久雄『社会科学の方法』をめぐってー」(同、二十九号、平成二年)も「最高道徳」を焦点にしている。

竹内啓二の「モラロジーと原始仏教の倫理思想」(同、二十六号、昭和六十三年)は、廣池が釈迦の思想・教説・事跡を、最高道徳を実践し説いたものにとらえたとの観点から見、最高道徳の五大原理それぞれと原始仏教とを対比させて検討した。

「聖人」と「最高道徳」さらに「自然の法則」などの諸概念の結節点にあたる「神」については、松村健一「モラロジーにおける『神観』研究史」(同、四十七号、平成十二年)が、媒体を広く当り精密な研究史を構成している。

以上のように、モラロジーにおいて聖人研究は重要な位置を占め、成果が積み重ねられてきたが、それらをふまえて廣池の聖人研究を全般的に捉え、現代に敷衍するものとして、竹内啓二を編者に『いのちと愛の思想ー廣池千九郎の聖人研究の継承と発展ー』(モラロジー研究所、平成二十二年)がある。本書は一般書であるものの、その立場は副題にあるとおりであり、孔子、釈迦、キリスト、ソクラテスの四大聖人にムハンマドと日本皇室を加え、さらに「聖人」という概念から廣池をとらえた論考

を、学術的な成果を踏まえてまとめられている。

（四） 諸専門領域への位置づけ

① 教育

廣池の最初の職業は小学校の教員であり、晩年の最重要課題も学校の開設という教育に関するものだった。その事跡は一貫して教育に関わっているということができ、そのため教育学的観点からの研究は重要な課題であった。

大澤俊夫『青年教師 廣池千九郎 付・廣池博士の学問上の業績』（廣池学園出版部、昭和五十七年）によると、「教育思想家としての先生、また教育家としての先生の業績については紹介も不十分で、まして近代教育史のうえにおける位置づけは、不当に無視されたまま今日に及んでいる」（本書「まえがき」と言つて過言ではなかったとのことであり、本書収録の論考は「青年教師としての活動と業績をはじめ取り上げた小論」（同）であった。¹⁶

大澤によって教育学的研究に先鞭が付けられると、さまざまな関心に広がりを見せた。井出元には「廣池千九郎の教育理想——実学教育と自主独立の教育——」（麗澤大学紀要）三十九号、昭和六十年）があり、教育哲学の視点も入った諏訪内敬司「中学校校長としての廣池千九郎——教育理念と教育実践——上・下」（『モラロジー研究』三十九号・四十号、平成六年）も教育者としての廣池を浮き彫りにする優れた業績であった。長年、学校における道徳

教育の現場に携わっていた石川恭治による「道徳教育・その基礎となる心の探求——廣池千九郎を手がかりとして——」（同、六十四号、平成二十一年）は、廣池の事跡・思想を検討することによって、現代の道徳教育への示唆を導き出そうとするものであった。

教育史的な観点では、山崎真之「明治前期大分県下毛郡樋田村における夜間小学校についての一考察——『遠郷僻地夜間学校教育法』と『廣池千九郎日記』を中心として——」（『社会と人文』二号、平成十六年）が、これまで時代性の解明が不十分だった小学校教員期を検討しており、さらに江島顕一「廣池千九郎の道徳教育論に関する一考察——中津・下毛における教員時代に焦点を当てて——」（『道徳と教育』三百二十九号、平成二十三年）、「廣池千九郎の教育思想——「中津時代」に焦点を当てて——」（『モラロジー研究』七十二号、平成二十六年）の研究が続き、教育学的課題に着々と応えつつある。

② 経済・経営

廣池には『道徳科学経済学原論』などの著述もあり、「前篇」にも説いた「道経一体」という命題によって廣池没後も積極的に道徳と経済および経営に関する研究が進められてきた。昭和五十三年には、廣池の著述の中から「道経一体」に関連する箇所を抜粋して編纂した『原典抜粋資料集 道経一体論』（全三冊、モラロジー研究所¹⁸）も刊行され研究が勢いづいている。

道経一体論研究の先駆をなしたのは目黒章布だった。先に触れた昭和四十一年の『広池千九郎博士生誕百年記念論文集』にはすでに「広池千九郎博士の経営観」を発表しており、これをもとに『広池千九郎博士の経営指導の研究』（広池学園事業部）を昭和四十五年、刊行している。本書は廣池の教訓「会社工場及び商店の最高道徳的経営法大要」を手掛かりにしていることからわかるように、企業への経営指導の現場に応用すべき実践的論考であった。

廣池と経済・経営に関する研究は初期の頃はこうした現場主義的なものが主であったが、その後、永安幸正によって理論化が進められている。永安は先に掲げた『道徳・教育・経済』所載の、「広池千九郎の道徳経済一体思想」にさきがけて、「広池千九郎博士の経済思想（一）」（『モラロジー研究』九号、昭和五十五年）があった。後に、「三方善の思想と実践―倫理道徳の深化のために―」（同、五十三号、平成十六年）では、広い範囲から「三方善」を扱いつつ、会社経営を中心に道経一体論を展開し、付録の「資料」には廣池のエピソードも多く引いており、資料集としても有用な成果となっている。『道徳・教育・経済』には、土屋武夫の「広池千九郎の経営理念」もあった。

永安の後を受けて企業倫理、経済倫理の立場から研究は継続されている。高巖「道徳性と経済―金解禁と緊縮政策に関する廣池千九郎の見解―」（『モラロジー研究』四十二号、平成八年）や大野正

英¹⁹「ウィリアム・スマートの『一経済学者の反省』と廣池千九郎（一）」（同、四十三号、平成九年）等がそれである。ピーター・ラフ「Business Ethics or Business as Ethics?: Chikuro Hiroike and the Material World」（同、六十七号、平成二十三年）もある。

③ 平和論と国際関係

廣池の道徳科学提唱の目的の一つには人心開発救済による世界平和の実現があった。そのため廣池の著述や言動には国家間の紛争解決や国際協調に関するものも多い。

「平和」を題材とするものには、宗武志「広池千九郎博士の平和論とその実践記録」（『モラロジー研究』六号、昭和五十二年）、欠端實「広池博士の平和思想」²⁰（同、二十五号、昭和六十三年）があり、「国際」をテーマにしたもので言うと、高巖「世界システム論の新展開―現代の国際政治経済と広池千九郎の平和思想―」（同、二十一号、昭和六十一年）、同「日米関係と広池千九郎の思想―日本の国際化と戦前の移民問題―」（同、二十五号、昭和六十三年）、梅田徹「晩年の広池千九郎と日本の対外関係―平和論の枠組みを超えて―」（同、三十五号、平成四年）があり、対西洋という観点からは、川窪啓資「広池千九郎と西洋」²¹（同、二十五号、昭和六十三年）、マイケル・パレンシア＝ロス「Hiroike and Western Traditions」（同、六十一号、平成二十年）を挙げることができる。

④ 文明と文化

「文明」の観点からの廣池研究も注目を要する。川窪啓資は「廣池千九郎と比較文明学」(『比較文明研究』第七号、平成十四年)において、比較文明学界に廣池を位置づけ、当該分野における先駆者の一人にあたるとした。廣池は「比較文明学」という言葉は使用していないが、研究領域、方法はそれに「重なるところが多々ある」という。続いて伊東俊太郎は、人類の歴史の転換期それぞれに人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命を置き、世界は今まさに環境革命を招来しているとすると、改めて「『精神革命』と自然の問題―廣池千九郎の意義―」(『モラロジー研究』六十五号、平成二十二年)において、精神革命に取り残されていた「自然」の問題に対し、廣池の自然観をもとに東洋の思想を加えて解決への示唆を与えている。西欧文明の潮流に対し、東洋の伝統思想によって屹立した人物として廣池を描く、金聖哲「日本における文明化とその思想的対応―廣池千九郎の信仰と道徳を中心に―」(『比較文化研究』一〇八号、平成二十五年)も、文明の観点における有意な研究であった。

こうした廣池の日本文化観を、井出元は「日本の伝統文化と廣池千九郎の道徳思想―『廣池千九郎研究』に関する補説―」(『モラロジー研究』三十一号、平成二年)においてさまざまな観点から詳細に論じている。

このほか、廣池の詩作に注目した、浅野栄一郎『廣池博士の

詩文の研究』(廣池学園事業部、昭和四十七年)²²⁾や、文化財の観点から事跡を論じた、橋本富太郎「廣池千九郎畑毛記念館における保存と展示」(『モラロジー研究』六十四号、平成二十一年)もある。

⑤ 哲学・思想・宗教・心理

井出元には中国哲学の立場からの廣池研究もある。「儒教と廣池千九郎の道徳思想」(『モラロジー研究』十八号、昭和六十年)では、思想と事跡の両面から儒教における「天」と廣池の神観とを比較・分析し、孔子と廣池の共通点を導き出している。

のちに「人間学」を焦点に研究を展開する水野治太郎にも古くから「廣池千九郎の人間観―ホモ・パチエンスとホモ・サジェンス―」(同、二十七号、昭和六十三年)があった。諏訪内敬司は「品性論」(一)～(七)において、カントやヘルバルト教育学等を段階的に取り上げ、最後の(六)と(七)に「廣池千九郎の品性論」①・②(同、四十九号、平成十三年/五十号、平成十四年)を充て、「品性」という概念から廣池を位置づけている。

廣池と直接の関係は無い人物との比較によって、思想を分析する研究も、質・量ともかなりの割合を占める成果がある。「前篇」にリストアップした国際会議における廣池千九郎研究にも多く見られる方法であった。多田舜保「L. C. Pauling 博士の業績と思想等について―7 ポーリング博士と廣池千九郎博士の人間性等の共通点―」(『麗澤大学紀要』三十五号、昭和五十八年)、ピー

ター・ラブ」[Soseki Natsume, Hiroike Chikuro, and the Uses of Freedom] (『モラロジー研究』六十一号、平成二十年)、「Fellow Spirits: The Life and Thought of Thomas Garrigue Masaryk, Contemporary of Chikuro Hiroike」(同、六十三号、平成二十一年)、川窪啓資「トインビーの高等宗教と廣池千九郎の聖人研究」(『比較文明研究』十五号、平成二十二年)²³、マイケル・パレンシアーロス「The Ortholimon Principle and Reverence: Civilizational Reflections on Hiroike, Schweitzer, and Gandhi」(『モラロジー研究』六十五号、平成二十二年)、金聖哲「日韓の近代化における利他思想の比較文化的考察―沈大允と廣池千九郎の道德・倫理思想を中心に―」(『言語と文明』九号、平成二十三年)等々、多くの業績がある。永安幸正「経済とモラル・サイエンス―スミス、ウェーバーの着眼と廣池千九郎の経済人間学をめぐって―」(『麗澤大学紀要』四十九号、平成元年)および前掲、岩佐信道「J. Lauwers の cosmic modesty の考え方と廣池千九郎の宇宙自然の法則」なども、思想の比較研究といえよう。

このほか、同時代に似た問題意識を持っていた人物との思想的比較研究(川久保剛「廣池千九郎と伊藤証信―『精神運動』の思想史に向けて―」『比較思想研究』三十五号、平成二十年)等も展開しつつある。

宗教学の観点では、鈴木康之が「宗教と道德の關係についての一考察―J・M・インガーの類型論からみた廣池千九郎の『宗教と

道德』論―」(『麗澤大学紀要』四十二卷、昭和六十一年)を著わしていた。

心理学者・水野修次郎はカウンセリングにおいて廣池の理論や実践例の応用に成果を上げており、またその立場から廣池研究にも取り組んできた。「The Self-examination of Dr. Chikuro Hiroike and its Application to Counseling」(『モラロジー研究』六十一号、平成二十年)をはじめ、「前篇」に一節を設けた「『道德科学の論文』を現代によみがえらせる試み」(同、七十一号、平成二十五年)収録の、「カウンセリングから考察する『人心の開発と救済の原理』」等がある。

(五) 神道

ではここで、神道に関わる研究を見てみよう。『記念論集』では、高原美忠による「『伊勢神宮と我国家』について―特に国体の淵源に関する廣池博士の説―」および、三瀧信吾「『日本憲法淵源論』の意義とその体系について」、そして増補版における西川順土「『古事類苑』と廣池博士」が深く関わる。

まず高原について、何より特筆すべきは「記念論集」の執筆者の中では唯一、廣池から直接教えを受けた経験があるという点である。しかもその時の教科書は廣池の『伊勢神宮』(『伊勢神宮と我国家』の旧版)だった。神宮皇學館の学生時に習った内容を、皇學館大学学長として評することになったのだった。

それもあつてか、あるいは専門性の関係からか、高原の叙述はやや砕けた内容となつている。単に紙面からのみでなく、廣池の生の声もふまえてその天照大神論を考察し、大神を歴史的・人物的に扱ふ傾向に一定の評価を与えており、そのことに大きな意味があつた。

しかし、高原によって先鞭がつけられたこの問題については、その後研究が深められてはいない。大澤俊夫も天照大神の岩戸籠りの解釈について、「改めて神道学者の意見を徴したい」（前掲『青年教師広池千九郎』一四二頁）と神道の後学に研究を託しているが、今も留め置かれた状態になつている。

次に『日本憲法淵源論』の評者、三瀧についてであるが、彼は、廣池に近い思想を持つ法学者・寛克彦の娘婿であり、寛の学統を継ぐ者として『日本憲法淵源論』を評するにはまことに適当な論者であつた。本書の生成の由来から説き起し、憲法学の観点から独自性を指摘し、哲学上の問題にも触れて廣池の神道信仰的な面を「在来の学問上の分別から見ても問題点が数多く内包され、かなり大胆に扱われている」（『記念論集』三四二頁）としつつも、それがゆえに諸問題解決の緒が内示されているともいう。

三瀧の論考は優れた研究成果であつたが、依然として『日本憲法淵源論』における主要な課題を残しているといえる。本書と『伊勢神宮と我国体』について内田智雄は「両書とも、博士

晩年の思想の先駆をなし、またその基調をなすところのもの」（『記念論集』「序」五頁）といい、『日本憲法淵源論』は特に「モラロジーの序説」（『モラロジー研究所所報』平成二十一年五月号、一六頁）との位置にある。本書は、法制史と道徳科学との間にあり、その間をつなぐものは、天照大神をめぐる神道の世界観であつた。そこは依然として解明されているとはいへない。

西川順士は、もともと『古事類苑』の書誌学的研究を手掛けたいたため、主要編纂者の廣池のことはあらかじめ認識しており、『記念論集』以前からその貢献には言及していた。しかし、『記念論集』の論考によって明らかにされた内容はこれまでの研究とはまったく次元の異なるものであつた。

西川は『古事類苑』の「原稿受領簿」（神宮文庫蔵）を精査し、そこから知り得る全巻における編纂者の原稿執筆量を割り出している。そして廣池の担当箇所については、各部各巻の全項目を一覧に上げ、編集方針の特色まで指摘した。

神祇部については、西川は『古事類苑』「月報」において「神祇部の編纂」を昭和四十二年から連載しており、その成果の上に廣池の担当箇所が検討されている。西川によると廣池は、神祇部全百巻の内の十三巻を担当し、その中には四十三・四巻の「神道」上・下が含まれる。西川は「神道」が廣池による新稿であることを明らかにするとともに、解説（二枚）の原稿を見出し、廣池によって書かれた上に佐藤誠実の訂正が施さ

れた後を追い、その形成過程を明らかにした。

神祇部「神道」の構成は、廣池の発案によるものであり、本項の位置づけは『古事類苑』における神道概念を知らしめると同時に、廣池の神道観をも示すものである。このことは近代神道史における重要な研究テーマといえるが、西川の考察の後に続くべき全体的検討はいまだなされておらず、今後の研究に待つ状況である。

つづいて個々の研究を見ていく。井出元の研究では、先に挙げた「廣池千九郎における東洋思想史研究」(『モラロジー研究』十号、昭和五十六年)に、神道に深く関わる論点「祭祀」がある。井出は、廣池の東洋研究は「祭祀」論を主たる対象とするものとして、中国と日本の両国それぞれに対する廣池の祭祀論を検討し、その道徳的意義を重視した。日本における祭祀は伊勢の神宮を中心とする神社が主な対象であり、廣池の思想形成上における神道の関わりに新たな知見がもたらされている。

井出はそのほかにも、「日本の伝統文化と廣池千九郎の道徳思想―『廣池千九郎研究』に関する補説―」(同、三十一号、平成二年)や「『日本人の道徳を考える』―廣池千九郎の生涯―」(同、五十七号、平成十八年)等において、日本の伝統文化や道徳の観点から、それらの基底にある神道的なるものをさまざまな角度から論じている。前掲の「『神の原理』の形成―廣池千九郎における信仰と道徳―」(同、二十二号、昭和六十二年)も「日本固有の

宗教思想」といった観点から神道を捉えていた。こうした研究から、廣池が「神道」という語に直接言及していないところでも日本人の敬神・尊王・祖先崇拜などの概念をとおして、それと深く関わっていることを一層明らかにしている。

欠端實には、国学者との交流に焦点を当てた、廣池における神道精神の形成の実証的研究がある。「廣池千九郎におけるアイデンティティの確立―井上頼圀との関わりにおいて―」(同、五十六号、平成十七年)や、「渡辺玄包と廣池千九郎」(同、六十号、平成十九年)において、廣池が国体研究を志向する必然性を人物の影響関係から実証したものだ。

欠端は、廣池における井上との関わりについて、「各時代の研究成果は、井上との関係を抜きにしては考えられない。晩年の『モラロジー(道徳科学)』の学的樹立とそれに基づく社会教育活動も、日本のアイデンティティ研究によって得られた成果が思想的核になっている。敢えて言えば、井上の影響は生涯を貫いているということができよう」(同、五十六号、二頁)と、その影響の大きさを指摘していた。

神宮皇學館における研究・教育活動については、拙稿「神宮皇學館における廣池千九郎の神道講義―教授就任から『神道講義』開講まで―」(『神道史研究』六十一巻二号、平成二十五年)および「廣池千九郎の神宮皇學館における神道教育―『神道史』開講から退官まで―」(『皇學館論叢』四十七巻一号、平成二十六年)がある。

ところで、廣池千九郎研究における「神道」は、時代・場所を問わない全般的な「神道」と、廣池の在世中およびその後、彼が関わったところのそれとに大別することができる。後者の方でいうと、すでにいくつか挙げてきた天理教に関係する諸論文は神道学的研究に含まれることになる。

つまり、廣池が関係した天理教は当時、「教派神道」に属しており、十三派の内一派であった。天理教固有の信仰に重ねて、敬神・尊王・愛国等の国民道德的神道が説かれており、廣池の見た天理教は日本国体に合致した宗教だった。この前提で先に見た櫻井良樹や立木教夫の諸論考を読み直すと、近代神道史をめぐる、未発掘の同時代史料を多用したすぐれた研究とすることができよう。

廣池の天皇論に関する研究では、美和信夫の果たしてきた役割が大きい。美和は前掲の『モラロジー創建五十年記念学術論文集』（昭和五十一年）において、「廣池博士の天皇論と戦後の天皇（制）論」を発表しており、さまざまな天皇論を広く渉猟し、その中に廣池の論を位置づけ特色を明らかにした。また、上述の「(二) 廣池提唱の諸概念の研究」のところに入っている「廣池千九郎の格言『慈悲寛大自己反省』の形成過程に関する考察」（『モラロジー研究』二十五号、昭和六十三年）は、天照大神の神徳に関する研究でもあった。

このテーマにおける美和につづくものは所功による研究のほ

かない。所は、前述の第二回モラルサイエンス国際会議（二〇〇九年）において「廣池千九郎博士の『万世一系』最高道德論の再検討」と題し、歴代天皇を世界五大道德系統に位置づける廣池の説を現代の視点から論じた。報告書『廣池千九郎の思想と業績』（モラロジー研究所、平成二十三年）所収の論文によると所は、廣池による皇室の史的研究から天照大神神話の道德的解釈を歴史学的研究によって跡づけ、他の論者との比較と歴代天皇の御聖徳の実例を用い、廣池の万世一系論を肯定的に捉えている。

二、時代区分について

最後に、廣池の研究遍歴を時代区分によって整理したものをみてみよう。大澤俊夫によると、区分法は、(1) 生活史を中心として、(2) 精神史を中心として、(3) 学問上の業績を中心として、以上の三種となっている。

区分法が成立した順に、まず、廣池の人生を二期に分ける(2)の「精神史を中心として」を見てみよう。

- ① 慶応二年～大正元年……………第一期
- ② 大正元年～昭和十三年（没年）……………第二期

この分け方の出所は『廣池博士全集』（昭和十二年）所収の廣池利三郎による「父の学問上の経歴并に其近著『道德科学の

論文』に寄せられたる諸家の御序文の概要」であり、次のように記されている。第一期は明治二十三、四年頃より大正元年頃（四十六歳）までの「主として或は語学者として或は東洋（特に支那）法制史家として活躍」という時代。第二期は、大正元年より現在（昭和十二年）に至るもので、「道德の科学的研究并に社会的教化に費されて居る」時代である。

第一期から第二期への変化の理由は、「一面に於ては、大正元年大患を得て、生死の巷を彷徨したる際、悟得体験せる強烈なる精神的、内面的自覚と、他面に於ては、世界大戦勃発の頃より、漸次に表面化し来たれる思想、道德の急激なる悪化等の外面的事情とが相合して斯くの如き一大転回を可能ならしめた」という。

この時代区分は昭和十二年と最も古く、かつ廣池千九郎存命中のことであったので、廣池自身も認めるところであったと思われる。

次に、(1)の生活史を中心とした区分は左記のようになる。

- ① 中津時代（慶應二年～明治二十五年）
- ② 京都時代（明治二十五年～明治二十八年）
- ③ 前期東京時代（明治二十八年～明治四十年）
- ④ 伊勢時代（明治四十年～大正二年）
- ⑤ 奈良時代（大正二年～大正十二年）
- ⑥ 後期東京時代（大正十二年～昭和十年）

⑦ 千葉時代（昭和十年～昭和十三年）

以上である。この区分は、昭和四十一年に刊行された『広池千九郎先生の生涯』（広池学園出版部）が採った方法であり、その後、『資料が語る廣池千九郎先生の歩み』（昭和四十八年）等に踏襲され、一部修正もあったが長らく使用されていた。『伝記 廣池千九郎』の七部門も、言葉は変わっているが基本的にこの時代区分によっている。

続いて、(3)学問上の業績を中心とした分類だが、これは内田智雄によって案出された方法である。前出の『記念論集』の「序」において内田は、

広池博士の思想も学問も、私見によれば、およそ三つの時期に分けることができるかと思う。いまそれを、かりにその主な著作について見るとすれば、「中津歴史」に始まり「史学普及雑誌」にいたるひとつの時期、次は「東洋法制史序論」および「東洋法制史本論」を経て「日本憲法淵源論」にいたる時期、さらにいまひとつは、道德科学を提唱し始められた頃から、その最晩年にいたるまでの時期である。（四頁）

と述べていた。この分類法に大澤は「学問上の業績を中心として」と銘打ち、研究分野と主な著作をもとに三期をさらに七項目に細分化し、それぞれに「〇〇者として」と、その時期の立場を表出させている。

- ① 歴史学者として
『中津歴史』(明治二十四年十二月)
『史学普及雜誌』第一号〜第二十七号(明治二十五年九月〜明治二十八年四月まで)
『皇室野史』(明治二十六年五月) ほか
- ② 事典編纂者として
『古事類苑』(明治二十八年四月〜明治四十年十月)
- ③ 文法学者として
『支那文典』(明治三十八年十月)
『日本文法てにをはの研究』(明治三十九年八月)
- ④ 律令学者として
「倭漢比較律疏」(明治三十九年十一月)
- ⑤ 神道学者として
『伊勢神宮』(明治四十一年十二月)
『神社崇敬と宗教』(大正四年八月)
『伊勢神宮と我国家』(大正四年九月) ほか
- ⑥ 法理学者として
『東洋法制史序論』(明治三十八年十二月)
『東洋法制史本論』(大正四年三月)
『日本憲法淵源論』(大正五年十月)

第一期

第二期

⑦ 道徳科学者として

- 『道徳科学の論文』(昭和三年十二月)
『孝道の科学的研究』(昭和四年八月)
『新科学モラロジー^{モラロジー}及び最高道徳の特質』
(昭和五年十二月) ほか

第三期

この分類法は、廣池の研究遍歴や思想の変遷を知る上で重要な役割を果たしたことは論を待たず、内田の提唱した「広池学」の体系を示すものともいえよう。大澤はさらに、①から⑦のそれぞれに、廣池の代表的業績に解説を加えて内田の体系を敷衍し、モラロジーの裾野を構成する領域を明示した。

しかし、この分類法にも欠点がある。例えばこれに従うと、①の「歴史学者」は『皇室野史』の明治二十六年で終わったことになっており、それ以降の歴史学者としての価値ある業績が埋没してしまいかねない。逆に神道学者としての仕事は、次稿に述べる神道学の範囲からすれば、①の段階からすでに始まっており、⑥の段階にまで続き、筆者に言わせれば⑦にまで至るものなのである。

時代ごとに区切ることにこのような限界があるが、この課題を埋める位置にあるのが『人 廣池千九郎』(麗澤大学広報課、平成六年) および廣池千九郎記念館の展示の手法である。

両者は、廣池の人生を時代ごとではなく、三つの領域「学

者」「教育者」「救済活動者」(順番は異同あり)それぞれで個別に人生全般を論じたのち、一方は「モラロジーの創始者・生涯教育の先駆者」(『人 廣池千九郎』)によって、もう一方は「モラロジーの確立と活動の展開」(廣池千九郎記念館)というテーマによって結んでいる。

この方法によると例えば、教育に関連する情報が少年期から晩年まで通史的に知り得て、初期の教育思想が最後の学校建設にまで反映していることが理解できる。また、学者としての立場が終生続き、他に比べて業績が顕著であり、廣池自身がアイデンティティを「学者」に置いていたことがよくわかる。

ただ、この方法によってもやはり領域ごとの断絶は発生し、領域から漏れてしまう事象があり、また全体を理解しようとする領域ごとに人生をさかのぼり直さなくてはならないことが煩わしいという問題がある。²⁸⁾

おわりに

以上に研究史を見てきたことによって、廣池千九郎研究は膨大な量に上り、研究領域も多彩な分野に亘ることが理解できた。その中で神道に関連するものも数多く、幅広く検討されていたことは先に述べたとおりである。

しかしその一方で課題も明らかとなった。そもそも、廣池が

神道の中で大きな役割を果たしてきたにもかかわらず、それが十分に理解されているとは言いがたいのが現状である。また、神道の要素がその道徳論の中に色濃く反映されているにもかかわらず、その道徳的効用として把握されることがほとんどなかった。こうした状況の原因には次のような事情が考えられる。

まずこれまで、神道全般と廣池の人生とを通史的にとらえた研究が存在しなかった。廣池と神道との関わりは相当な量に上るのだが、例えば『伊勢神宮』などの文献に関する研究や、国学者との交流に関する研究、そして廣池の思想形成に係る部分の研究など、神道の要素が分解されて個別に論じられてきた。また、神道学史に基づいた廣池研究なされなかったために、『伊勢神宮』は神宮について、近代的手法によって書かれた最初の研究書なのだが、そのような功績が研究史上に位置づけられることがほとんどなかった。

加えて、廣池の人生が、「中津時代」、「京都時代」と区切られて考察される傾向があるため、例えば中津時代にすでに形成されていた神道的「大義名分論」が晩年に至るまで生き続け、その時々々の原動力の一面を成していることが見えにくくなっている。さらに、神道との関わりが、ある時期において終わったかのようにも捉えられてきた。

このような状況下にあるため、神道のそれぞれの要素が関連づけられて広く深い相互の影響関係が認識されるような機会が

得られなかったのである。

こうした現状をふまえ、次稿では、神道の全体像と近代神道史の中に廣池を置き、課題を検討して研究の方法および視角を提示して「緒論」の結びとしたい。

註

(1) 『モラロジ―研究』七十四号、平成二十七年二月。

本研究「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論」は(一)から(四)までの構成となっており、本稿は(三)にあたる。(一)は、副題に「道德における廣池の位置」を置き、さまざまな分野に足跡を残した廣池が最終的には新しい道德論を提唱し、それに基づく学校を造って教育に尽力したことを鑑みて、在世当時から現在に至るまで、「道德」の世界で廣池がいかに評されてきたのかを、その後継者も含めて検討した。(二)「研究史前篇」と(三)「同、後篇」(本稿)では、研究史を辿り、内容の分類を試みている。廣池研究は、これまでかなりの量が蓄積されてきてはいるが、研究史が顧みられることがほとんどない、という問題があった。そこで本研究では、神道以外の分野も含めて研究史に多くの紙面を割き、その充実を明らかにし、課題を抽出することを重視している。

(2) 同じく『道德科学の論文』の「第二版の自序文」(昭和九年)には、アインシュタインの言葉「彼の言葉に声を傾けないで、彼の為した業績(Achievements)を検査せよ」(第二版、二八頁)を引き、実践を重視するよう注意を与えている。

(3) 中田中『思い出の旅―広池博士に随行して―』(広池学園出版部、昭和三十五年)、『心にともす光』(広池学園出版部、昭和三十

七年)、『最高道德の帰着点』(広池学園事業部、昭和五十三年)、『必要なときに必要なものが』(広池学園出版部、昭和五十五年)、『取り違えた最高道德』(広池学園出版部、昭和五十八年)。香川景三郎『感恩の情―最高道德の生命―』(広池学園事業部、昭和四十年)、『まことの心―広池博士の思い出―』(道德科学研究所、昭和四十四年、香川初音と共著)。松浦香『不朽の教え―広池博士の思い出―』上・下(広池学園出版部、昭和四十二・三年)、『道德と経済をひとつに―広池博士の事業指導―』(道德科学研究所、昭和四十五年)、『光は東方より―モラロジ―第二期建設時代―』(広池学園事業部、昭和四十六年)、『広池博士の講義―昭和七年大阪第一回講習会における聴講メモより―』(広池学園事業部、昭和四十七年)、『大いなる慈悲心―広池博士に導かれて―』(広池学園出版部、昭和六十年)。廣池千英『父の人間像』『廣池千英選集』第二卷(広池学園事業部、昭和四十五年)。廣池富『父廣池千九郎』(広池学園出版部、昭和六十一年)。廣池千津子『味は愛、形は敬』(広池博士と料理) (広池学園出版部、昭和六十三年)等。事跡研究に関連して、モラロジ―研究所編『廣池千九郎語録』(広池学園事業部刊、昭和五十二年)も刊行されている。近年も、モラロジ―研究所編刊『廣池千九郎の行迹77篇』(平成十八年)や、同『廣池千九郎エピソード』一―五(平成二十四―七年)などが続いている。東日本大震災の発生に際しては、さつそく諏訪内敬司により災害に関連する事跡が『廣池千九郎の義援・救援活動』(モラロジ―研究所、平成二十五年・小冊子)にまとめられている。

(4) のちに大澤俊夫『師の心を求めて』(モラロジ―研究所、平成十七年)に収録。

(5) 「廣池博士が特に『潜在的伝統』を立てた理由に対する考察

- と、その前後の経緯」(『道徳科学研究』三十号、昭和四十四年)、「廣池博士の資料の研究―前期東京時代―」(『研究ノート』一八一号、モラロジー研究所研究部、平成九年)、「廣池博士の資料の研究―伊勢時代―」(『研究ノート』一八二号、同、平成十年)等。
- (6) 「前篇」掲載のモラロジー研究所編『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』(広池学園出版部、平成元年)に収録されているのはこの論文である。
- (7) 井出には本稿掲載の主な論文をまとめた『廣池千九郎の思想と生涯』モラロジー研究所、平成十年)をはじめいくつか廣池に関する単行本がある(「前篇」参照)。
- (8) 下程の指導の下、教育人間学の根本問題に立脚し、廣池千九郎研究に取り組む上での重要なポイントを学んだことが、立木教夫「人間学研究―二宮尊徳研究会から学んだこと―」(『モラロジー研究』二十九号、平成二年)に詳述されている。
- (9) 栗原には著書『経路 廣池博士の救済への願ひ』(広池学園出版部、平成元年)もある。
- (10) 最高道徳については昭和三年刊行の『道徳科学の論文』によって詳述しているが、五つの原理に分けて概説したのは、『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』(昭和五年)においてである。「自我没却の原理」「神の原理」「義務先行の原理」「伝統の原理」「人心開発救済の原理」の五つ。
- (11) 格言は、『道徳科学の論文』全二巻の内の二巻「最高道徳の大綱」に大半にあたる。
- (12) 廣池は、日本語の「誠」は英語の「Truth・Sincerity・Benevolence」の三語を合わせた以上のものであるといひ、自身が実践した重要な救済体験を「誠の体験」と称した(『回顧録』「回顧録」第二章、広池学園出版部、平成三年)。「誠の体験」は井出元『人生の転機―廣池千九郎の生涯―』(広池学園出版部、平成七年)の第二章に詳しい。
- (13) 『道徳科学の論文』第十五章「最高道徳実行の効果に関する考察」の内容を端的に表した言葉であり、『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』には、「因果律の原理」の語がみえる。
- (14) 『道徳科学の論文』第二版の自序文には、「宇宙間に産出して此間に生存する所の我々人間としては、此宇宙自然の法則(Law of nature)に従はねばならぬ事は明らかであります」(昭和九年)とあり、これに従うことが廣池の道徳論の基底にある。また「モラロジーの実質と内容を形造つて居る所の所謂最高道徳は天地自然の大法則の異名である」とも言っている(『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』道徳科学研究所、昭和十一年、四五頁)。なお、このテーマに関連した成果として欠端實には「宇宙の心、自然の心 廣池千九郎に学ぶ生き方」(広池学園出版部、平成七年)がある。
- また、廣池はこの「自然の法則」のほか、恩人の系統を意味する「伝統」に対して、服従するということを重要な徳目に位置づけている。「服従」については、宮下和夫「恩恵とどう向き合うか―服従の精神をめぐって―」(モラロジー研究所、平成二十七年・小冊子)がさまざまな面から検討されており理解に有用である。
- (15) 水野はこのときすでに、『モラロジー』とは、どのような科学か(開発シリーズ⑤)、広池学園事業部、昭和四十六年)を著わっていた。
- (16) 本書の第二部は、「廣池博士の学問上の業績」となっており、昭和四十一年の廣池生誕百年時以来の学問的業績の研究について、時代別および内容別に整理している。内田の『先学のあしあと』と

は違う立場からの優れた回顧と分析である。

- (17) 本論文掲載の『麗澤大学紀要』(三十九号、昭和六十年)は、廣池学園創立五十周年記念特集号であり、ほかに、浅野栄一郎「本学創立期の教育理念とその実際」および水野治太郎「草創期の教育理念の今日的意味」など、学園創立期の廣池の事跡・教育理念に深く関係する論文もある。

- (18) 第二刷から『道経一体思想』に改称。さらに平成六年には、コンパクトに編纂し直した、モラロジ研究所『廣池千九郎著作抜粋 集道徳経済一体思想』(廣池学園出版部)が刊行されている。

- (19) 大野は、近江商人の経営理念を表す「三方よし」という標語のルーツが廣池にあることを実証している(『「三方よし」の由来とその現代的意義』モラロジ研究所、平成二十五年・小冊子)。「三方よし」の研究にはそれ以前に、足立政男に「モラロジ経済学原理の実践的有効性について―京都における老舗の家訓・店則から見えて―」(『モラロジ研究』二号、昭和四十九年)などの研究の蓄積がある。

- (20) 註(6)に同じ。

- (21) 同。

- (22) 廣池の詩文についてはほかに、瀬戸衛「廣池千九郎博士の麗沢館時代の詩文の研究」(『研究ノート』一四一号、昭和五十七年)がある。瀬戸は『小川含章先生の御偉業と現代的意義』(勝光寺麗沢館顕彰碑除幕式記念、昭和五十一年・小冊子)など小川研究も手掛けている。もう一点、「廣池博士の考証学に関する研究」『道徳科学研究』三十七号、昭和四十三年も評価すべき研究である。

- (23) 川窪による比較研究の着手は早く、「インド古代思想史における原始仏教成立の意義および釈尊と廣池千九郎博士の本体に対する

考え方の比較研究」『道徳科学研究』三号、昭和三十八年などもある。

- (24) 大澤俊夫「廣池博士の人と業績」『社会教育資料』五十三号、昭和四十三年、一〇八―一一〇頁。のちに、同『青年教師 廣池千九郎』廣池学園出版部、昭和五十七年、一一二―一一五頁収録。

- (25) 『廣池千九郎博士事蹟研究会 研究資料』1―7は、時代を七つに区分することには変わりないが、途中、「伊勢・奈良時代」「奈良・東京時代」という分け方になっている。

- (26) モラロジ研究所編刊『写真に見る廣池千九郎の生涯』(平成十四年)はこれを踏襲。

- (27) 廣池千九郎記念館は、開館当初は編年体のみでの展示だったが、平成十五年に同敷地内に新築リニューアルした際に改められた。一階が「廣池千九郎とモラロジ」でこのような展示になっている。地階は「廣池千九郎の生涯」であり、編年体となっている。

- (28) 『伝記 廣池千九郎』や内田説のように時代ごとに区切る方法と、「人 廣池千九郎」や記念館の展示のようにテーマごとに分類する方法のそれぞれの欠点を補うため、平成十六年四月開設の「廣池千九郎ウェブサイト <http://www.hiroike-chikuro.jp/>」では、一つの画面から「年代」「テーマ」八項目いずれをも選択できるようなって断絶が起きないよう考慮されている。

(キーワード：廣池千九郎、研究史、神道、モラロジ)

